

アマゾン移民の背景 — 熱帯にかけた夢 —

1908（明治 41）年の「笠戸丸」による初めてのブラジル日本人集団移住から 21 年。1929（昭和 4）年に、パラ州アカラ植民地へ 42 家族単身者 9 名の 189 人が到着したことを、現地ではアマゾン地域への日本人移住の起源とし、2009 年、アマゾン日本人移民 80 周年祭が行われました。

最初に日本人が移住した中伯地域のサンパウロ州は、コーヒー農園での契約労働が主でしたが、熱帯に属する北伯地域（パラ州、アマゾナス州をはじめとするアマゾン地域）は、ジャングルに覆われた未開発の土地が広がっていました。中伯地域における日本人移住者の評判はアマゾン地域にも及び、パラ州知事ディオニジオ・ベンテスは、1923 年に田付七太駐伯大使に、日本人によるアマゾン地域の開発を打診し 50 万ヘクタールの土地の譲渡を約束しました。

人口の増加や経済問題から、日本人の海外発展の地を求めていた日本政府は、企業、財界にも協力を要請。鐘淵紡績株式会社の資金協力を得、1926（大正 15）年、同社取締役であった福原八郎を団長とする調査団がアマゾン地域へ派遣されました。国家と企業家、また、海外雄飛をめざす移住者のアマゾン開発にかける夢はひとつとなり、南米拓殖株式会社や、日本高等拓殖学校など関係機関が相次いで設立され、植民事業が進められます。

しかし、過去ヨーロッパ人による幾多の挫折を見ているアマゾン開発は容易な事業ではありませんでした。植民地からは離脱者が相次ぎましたが、海を渡った日本人移住者は、厳しい熱帯の自然との苦闘の末にアマゾンの基幹産業となった、ジュート（黄麻）とピメント（胡椒）栽培の成功を勝ち取って行くのでした。

問いの例

・移住者は、「行け行け同胞海越えて 遠い南米ブラジルに 御国の光輝かす 今日の船出の勇ましき 万歳万歳・・・」という歌で送り出されたそうです。そして船の上では希望のうたを歌い、到着したトメアス（アマゾン川流域の町）では「行こかサンパウロ 帰るかジャポン ここが思案のパラー州 着て極楽 来てみりゃ地獄 落ちる涙はアカラ川」と歌ったそうです。どのように気持ちが変わっていったのでしょうか。

（学習活動の手引きの活動 3 「海外に移住した人々—五十嵐みよしさん—」より）